

2014年度 湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」成果報告書
European Conference on Pattern Language of Programs における
『Creative Education Patterns』の向上に向けた研究発表

総合政策学部2年 原島裕志
総合政策学部3年 窪田哲朗

1. 活動日程・会場

7/9 - 7/13 ドイツ連邦共和国 バイエレン州・Kloster Irsee

2. 活動の目的

本研究は、教育者が学習者の創造性を育む方法として、学習者が実際に何か新しいものを「つくる」実践に取り組み、その取り組みの「なか」で、知識や技能を身につけていくという方法に注目し、そのような方法の実践の場づくりを支援するツールをパターン・ランゲージの手法を用いて作成しようとするものである。今回の活動では、ドイツで開催されるパターン・ランゲージの国際学会である European Conference on Pattern Language of Programs(EuroPLOP) にこれまでの研究成果を発表し、専門家やその他の参加者から講評や具体的なアドバイスを得て、研究成果である『Creative Education Patterns』の向上を図る。

3. 活動の成果

今回の活動を行うにあたり、期待されていた効果は2つあった。ひとつは学部者かつパターン・ランゲージの作成に熱心に取り組んでいる研究者から評価を受けることで、今回発表するパターンをより良いものとするのであり、もうひとつは、創造性を育むことを主眼においた教育のパターン・ランゲージを作成する本研究の進め方に対するアドバイスが学会参加者から得られることであった。

1つめについては、期待どおりの形で研究成果に対する評価を受けることができた。学会開催前の4月初旬から6月上旬にかけて、事前に学会側から割り当てられる論文指導者と論文改善のための意見交換を行う「シェパードイング」というプロセスにおいては、研究の根本となる「創造性の育成」という目標に加え、近年の動向から「良い気質の育成」も焦点に入れてはどうかという提案を受け、研究そのものの軌道修正を行うことができた。また、学会のプログラムの中心であり、参加者間の対話形式で、研究や成果物であるパターンに対して互いに建設的なコメントやフィードバックを与え合うという研究発表形式である「ライターズ・ワークショップ」では、個々のパターンの細部に至るかなり具体的な提案が多く得られたほか、パターンの形式について普遍的な議論のうえで、今回提出したパターンの形式に対する提案も得ることができた。

2つめについては、期待とは異なる形ではあったが、十分満足できる成果を得ることができた。学会に論文を提出した時点では、今回参加した学会が世界各地で開催されるパターン・ランゲージの国際学会のなかでも教育関係のパターン・ランゲージの作成に取り組む研究者が多く参加する学会であるため、そのような人々から研究へのアドバイスを得ることを主に期待していたが、実際の学会では、「創造性」をテーマに掲げた研究を集めたグループに割り当てられた。これは当初の予想に反することであったが、「創造性」そのものについての議論や、パターン・ランゲージの在り方など、重要かつ抽象的な議論を深く行い、その文脈で「創造性の育成」を目標を掲げる

本研究へのアドバイスを受けることができたため、期待していた以上に今後の研究のために実りある成果が得られた。また、今回は学会側から提案を受け、論文の研究発表にあたるライターズ・ワークショップに加え、普段研究室で行っている手法でパターン・ランゲージの作成に取り組む「パターン・マイニング・ワークショップ」を開催した。これまでも井庭崇研究室のパターン・ランゲージの作成手法は独特なものとして注目されていたのだが、今回、実際にそれを体験してもらい、高い評価・反響を得ることができ、研究手法に対する自信を深めることができた。



図1 ライターズ・ワークショップ グループ集合写真



図2 パターン・マイニング・ワークショップの様子①



図3 パターン・マイニング・ワークショップの様子②

4. 今後の課題

まずは今回得られた提案や助言を反映させた論文の最終稿の執筆に取り組む。またそれに合わせ、今回発表した4つのパターン以外のパターンの改善にも取り組む。成果物である『Creative Education Patterns』は今後数年をかけて漸進的に質と量の両方を充実させていく計画であるが、今回の改稿が終わった段階で、ウェブ上での公開等、対外的に公開することを検討している。

「創造性とは何であるか」など、この研究の根本となる部分について、今回参加した議論を延長する形で深化させていき、この研究の意義をより明瞭かつ説得的に論じられるようにする。そのための文献の読み込みや実践にこれまで以上に積極的に取り組んでいく。

5. 謝辞

ご指導いただいた井庭崇准教授をはじめ、インタビューーとしてだけでなく、適宜適切なアドバイスを下さったNPO法人東京コミュニティスクール校長市川力様、学会出席にあたり、資金面での支援をいただいた湘南藤沢学会様に厚く御礼申し上げます。